

多文化共生のための 国際理解教育・開発教育セミナー 報告書

兵庫県教育委員会

独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（JICA兵庫）

財団法人 アジア福祉教育財団難民事業本部

財団法人 神戸YMCA

2004年11月

目 次

はじめに	P 1
主催団体あいさつ	P 2
実践のための情報	p 6
講演記録	P 7
1 基調講演「開発教育・国際理解教育で何ができるか」	P 7
同志社女子大学現代こども学科 教授 藤原孝章	
2 セッション1 人権・多文化共生	P 10
a. 多文化共生のまちづくり 多文化共生センターひょうご 岩山 仁	P 10
b. 多文化共生の学校づくり 川西市立加茂小学校 教頭 綿巻秀樹	P 12
3 セッション2 貧困・開発	P 14
a. 熱帯林をめぐる開発と私たちの暮らし 開発教育協会大阪事務所 荒川共生	P 14
b. 貧困の原因はどこに PHD 協会 総主事代行 藤野達也	P 16
4 セッション3 平和	P 18
a. 平和はいかにつくられるか 神戸市立六甲アイランド高校 教諭 高野剛彦	P 18
b. わたしが難民になったら 難民事業本部関西支部 支部長補佐 中尾秀一	P 20
5 クロージング・セッション	P 22
資料	
事後アンケート集計結果	P 23
日程表	P 31

はじめに

今日、世界は、紛争、貧困、環境破壊、難民など、地球的な規模で様々な課題に直面しています。これらの諸問題に対して、私たちにできることは何かを考えるために、学校や社会教育の現場などで多文化共生教育や国際理解教育、開発教育が取り組まれてきました。

また、兵庫県には10万人を超える外国人県民が暮しており、異なる文化や生活習慣、価値観を相互に理解し、豊かに共生する多文化共生社会の実現を目指して様々な取り組みがなされています。

このたび、多文化共生教育や国際理解教育、開発教育を推進し、より実践的な取り組みを図るため、兵庫県教育委員会、JICA兵庫、難民事業本部、神戸YMCAの4団体が主催し、「多文化共生のための国際理解教育、開発教育セミナー」を開催いたしました。学校教員や教育に携わる90名を超える方々にお集まりいただき、2日間にわたるプログラムの中で実践経験豊かな講師の講演とワークショップにより、多文化共生教育や国際理解教育、開発教育の意義や取り組みを学ぶとともに、人権・多文化共生、貧困・開発、平和の3テーマについて、いかに児童・生徒とともに学んでいくか熱心な話し合いが行われました。

ここに各講師の講演内容やワークショップの様子を報告書としてまとめました。今後の多文化共生教育や国際理解教育、開発教育のご参考になりましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、今回のセミナーにご協力をいただきました講師の方々に厚く御礼申し上げます。

主催者一同

兵庫県教育委員会 人権教育課
主幹 桑原 浩

皆さん、こんにちは。

現在、インターネットや衛星放送など、あらゆる面で国際化が進む時代にあって、多様な文化的背景を持った人々と共に暮らし、共に自己実現をめざす豊かな社会の構築に向けて、国籍や民族を越えて人と人、心と心をつなぐ多文化共生教育の取組が重要になってきています。

現在、約6,000人の外国人児童生徒が県下の学校に在籍しています。この中で日本語指導が必要な児童生徒は、昨年9月の調査によると、764人であり、227校に在籍しています。また、帰国児童生徒を合わせると825人という人数になります。学習言語の指導が必要な児童生徒も含めると、実数は、もっと多いのではないかと考えられます。

新たに渡日してきた外国人児童生徒にとって、言葉の壁というのは非常に大きな課題となっています。言葉の壁があることで、互いの考えや思い、願いなどが伝えきれなかったり、その背景となっている生活習慣などの文化の違いを理解し合えなかったりすることから、学校生活において、児童生徒の孤立化、不登校や不就学、問題行動、アイデンティティの確立が困難などの様々な課題が生じてきています。

一方では、日本人の児童生徒も異なった文化や習慣を持った外国人児童生徒と共に生活をする機会が増えており、すべての子どもに、豊かな共生の心をはぐくむ取組の必要性が叫ばれています。

このような中、県教育委員会では、平成12(2000)年に「外国人児童生徒にかかわる教育指針」を策定し、「子ども」「教育」をキーワードに外国人児童生徒の人権を尊重した教育指導の徹底を図っています。昨年10月には、県立芦屋南高等学校敷地内に子ども多文化共生教育の中核となる「子ども多文化共生センター」を開設いたしました。

また、日本語指導・多文化共生の取組を推進するための教員配置校26校、日本語指導の研究校4校、学校を核に地域ぐるみで多文化共生の取組を推進する子ども多文化フロンティア校10校を指定し、外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに、すべての児童生徒に豊かに共生する心をはぐくむ多文化共生教育を推進しているところであります。

学校現場における日本語指導の状況については、教材も十分ではなく、体系的な指導法も確立されておらず、試行錯誤の中で、手探りで指導している現状だとお聞きしています。

二日間のセミナーが、参加者にとって充実したものとなり、それぞれの現場において、本日の成果が多文化共生教育、国際理解教育、開発教育の推進に活かしていただけることを祈念し、開会の挨拶とさせていただきます。

独立行政法人国際協力機構

兵庫国際センター 所長 大石 千尋

JICA 兵庫国際センターの大石と申します。

本日はお忙しいなか、たくさんの方にお集まりいただき有難うございます。

JICA は昨年 10 月に独立行政法人国際協力機構に生まれ変わり、従来にもまして自己責任・効率化・情報公開が問われることになりました。また緒方新理事長を迎え、新しい機構法のなかでは、新たに平和構築への取り組み、国民等の協力活動を明確に規定し、より国民の期待に応えるべく、これまでの組織、業務のあり方を抜本的に見直しをしました。

特に、近年、国際協力やボランティア活動に対する市民レベルでの関心が急速に高まってきており、草の根レベルでの協力活動の推進のみならず、国際協力全般に対する国民参加の促進という、より広い視点からの人材育成にも注力しております。

具体的には、地方自治体が推進する国際協力を支援するための研修のほか、NGO の組織強化などを目的とした NGO 人材育成プログラム、国際協力手法・技術研修や国内大学院での長期研修などの事業を実施しています。

また、将来の国際協力の担い手を育成し、国民参加の国際協力を一層推進するため、「国際協力出前講座」など教育課程における開発教育を支援する事業への積極的な取り組みも行っており、今後ともこうした人材育成を強化する方針であります。

なかでも、開発教育については、ODA 大綱の「国民参加の拡大」のなかで明確に位置付けられており、国民参加を推進する上で重要な柱になっております。

開発教育支援事業を進めていく上での最重要なターゲットは今日お集まりいただいた教職員の皆様方です。

私ども JICA の世界中の協力の現場には、異なった社会・文化・風土のなかで、その異文化の壁を乗り越えて、試行錯誤しながら協力活動に情熱を燃やしている人間達のドラマがあります。皆様方が学校教育の現場で、また生徒達との交流の場で国際交流・異文化理解を取り上げる際、私どもの活動現場の事例・経験は大いに役立つものと思います。

JICA 兵庫センターでは、地域のニーズに根ざしたセミナー、研修などの企画、講師の派遣、外国人研修員の派遣など、多種多様なメニューをそろえております。皆様方が教育の現場で途上国の問題を取り上げる際は、是非私どもにコンタクトしていただき、私どもの開発教育支援事業の積極的な活用をお願いしたいと思います。

本日のセミナーが是非、有意義なものとなるよう祈っております。

有難うございました。

多文化共生のための国際理解教育、開発教育セミナー 主催団体あいさつ

財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部

関西支部 支部長 竹村勝之

私ども難民事業本部は、ベトナムなどから難民として日本へやってきた人たちの生活を支援している団体です。このセミナーの主催団体の中では、一番皆さんに知られていないと思いますが、1979年から25年間、政府の委託を受けて難民の定住促進事業を行ってきました。

日本には1万人を超えるインドシナ難民が暮らしていますが、兵庫県は神奈川県に次いでたくさんの難民が住んでいるところです。特にこの神戸市と、以前受け入れ施設である定住促進センターのあった姫路市には、それぞれ1000人を超える難民の人たちが暮らしています。

定住から20年以上経っても、彼らの日本での生活には未だに苦勞が絶えません。難民事業本部には、仕事や住宅、教育や法律問題など様々な相談が寄せられますが、外国人というだけで入居できない住宅、名前がカタカナというだけで面接を受けられない会社が、今の日本には、まだまだたくさんあります。ご近所とのトラブルで「難民は自分の国に帰れ」などと言われることもありますが、彼らには帰ることのできる国はありません。だから「難民」なのです。

難民のこうした悩みを解決するには、皆さんにもっと難民のことを知っていただくしかないと思います。セミナーやワークショップを開催したり、学校や地域の集まりに伺ってお話しをさせていただいています。更に多くの方に難民のことを知っていただくためにも、是非、学校の授業で難民のことを取り上げてもらいたいと考え、このセミナーの主催団体に加わりました。

紛争や迫害のために、住み慣れた故郷を追われ、異郷の地で不自由な暮らしを強いられている難民は、現在、世界に約2000万人いると言われていています。彼らのために私たちにできることは何か、そして日本に暮らす1万人の難民と共生するにはどうすれば良いのか、是非このセミナーをきっかけに、皆さんの学校で考えていただきたいと思います。

多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー 主催団体あいさつ

神戸YMCA

総主事 水野雄二

この度、4つの団体が共催してこのようなセミナーを開催することができたことを心から喜んでおりますと共に、ご参加いただいた皆さんにも感謝申し上げます。

YMCAは世界122の国と地域にあり、それぞれの国情に合わせた様々な活動を行っていますが、神戸YMCAは主に国際交流活動・国際教育・国際奉仕活動を大きな柱として活動や運動を推進しています。

国際教育の一環としての開発教育におきましては、1980年代前半に、この地でもっとも早く取り組んだのが神戸YMCAであり、今日、開発教育の理念と実践が広く展開を見て、このように多くのNGOやGO、学校教育現場の皆さんと一緒できることに対して、パイオニアとしてある種の感慨を持つものでございます。

開発教育の特徴のひとつに「体験型学習」ということがあります。YMCAは開発教育に限らず、ジョン・デューイの「進歩主義教育」に端を発する「子ども自らが学ぶ」体験型学習を重視しています。そこでは教育者は、子どもに正面切って知識を伝達するのではなく、子どもの傍らから、その体験と気づきを促し、サポートするのです。それは知識の一方通行に比べて、学習者の主体的行動をより強く導くと考えられています。

私は常々、私たちの活動や運動を推進するために大切な3つのプロセスがあることを申し上げます。一つは「知る」「気づく」ということです。そのための学びの機会が必要です。二つ目は「考える」。学んだことの意味が何であるかを考えるということです。三つ目は「行動する」ということです。知り、気づき、考えたことを行動に移すわけです。

その意味で、本日からの学びの機会は、体験型学習を通して皆さんご自身が知らないことを知り気づかれる機会になるでしょうし、考えるチャンスになるでしょう。そしてその次に、それぞれの現場で皆さんご自身が主体として行動に移されることを期待しています。

皆さんの積極的なご参画をよろしくお願い申し上げます。

実践のための強力サポート

○更に学びを深めるために

各団体主催のセミナー等（教員向け、一般向け）に参加すれば、より具体的な情報が得られます。
また、各団体に蓄積された情報は資料室で閲覧もできます。

○より良い授業をつくるために

各団体の専門家が講師として貴方の学校、団体に伺います。
児童・生徒向け資料を使って充実した授業づくりに役立ててください。

○困ったときには

各団体の専門家が授業の内容、組み立て、情報源等についてアドバイスいたします。お気軽にご相談ください。

主催団体紹介

団体名、HP、所在地、電話、メール、営業時間、活動内容 セミナー等、提供教材…※は教員向け 講師派遣…①内容、②派遣講師、③費用負担、④派遣地域	資料室…①分野、②蔵書数、③開館時間、④貸出 問い合わせ先…①担当者名、②連絡先（Tel、email等）
<p>独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（JICA 兵庫） http://www.jica.go.jp/worldmap/kinki.html#hyogo</p> <p>〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 Tel:078-261-0341(代) email: jicahica-kaihatsu@jica.go.jp 月～金 9:30-17:30 JICA は、日本国政府の開発途上国に対する技術協力を実施する機関であり、JICA 兵庫は全国に13箇所を設置されたその国内拠点の一つです。「よりよい明日を、世界の人々と」をモットーに、日本の人々と世界を繋ぐ架け橋として、海外での国際協力プロジェクトだけでなく、青年海外協力隊などのボランティア派遣や開発教育支援事業を実施しています。</p> <p>セミナー等…国際協力実体験プログラム、開発教育指導者セミナー※、教師海外研修※、国際協力フェスティバルなど 資料室…①国際協力（JICA 刊行物、一般刊行物、映像資料）、②約4,000冊、③月～金 11:00-12:30, 13:30-18:00、④貸出可 講師派遣…①国際協力出前講座、②青年海外協力隊OB/OG、外国人研修員等、③JICA 職員、研修員の場合は無料、④兵庫県内 問い合わせ先…神戸市の方①国際協力推進員（神戸市） 川池知代、②email: jicadpd-desk-kobeshi@jica.go.jp 神戸市以外の方①国際協力推進員（兵庫県） 三木まさよ、②email: jicadpd-desk-hyogoken@jica.go.jp</p>	
<p>子ども多文化共生センター（兵庫県教育委員会） http://www.hyogo-c.ed.jp/~mc-center/</p> <p>〒659-0031 芦屋市新浜町1-2 Tel0797-35-4537 email: mc-center@hyogo-c.ed.jp 当面の第1土・日曜日と平日 9:00～17:00 兵庫県教育委員会では、すべての児童に共生の心をはぐくむため、多文化共生教育の取組や外国人児童生徒の自己実現を図る取組を進めています。その中核施設として、教育相談や情報提供、研修等を行うことを目的とした施設です。</p> <p>研修会等…多文化共生のための研修会※、日本語指導担当者研修会※、ボランティア養成講座など 貸出資料…①国際理解、日本語指導、民族衣装、玩具等 ②約500冊 ③9:00-12:00, 13:00-17:00、④貸出可 講師派遣…①多文化共生教育、②担当指導主事、③無料（但し人権教育課(Tel.078-362-3793)を通じて依頼）、④兵庫県内（原則） 問い合わせ先…①志方、②Tel0797-35-4537 email: mc-center@hyogo-c.ed.jp</p>	
<p>（財）アジア福祉教育財団難民事業本部（関西支部） http://www.rhq.gr.jp</p> <p>〒650-0027 神戸市中央区中町通2-1-18 Tel078-361-1700 email: kansai@rhq.gr.jp 月～金 9:30-17:30 難民事業本部はインドシナ難民の日本での定住を促進するために1979年に設立されました。関西支部では西日本に定住するインドシナ難民、条約難民からの相談（生活、職業、日本語）を受け付けています。また、国内外の難民事情を啓発するためにセミナー、ワークショップ等も開催しています。</p> <p>セミナー等…セミナー「難民×教育」※（10月）、ワークショップ「難民」（5-6月）、セミナー「わたしたちの難民問題」（10-12月）など 提供教材…世界難民地図、「難民：私たちに何が出来るか（セミナー報告書）」、写真パネル（貸出）など 資料室…①難民関連、②約100冊、③月～金 9:30-12:30, 13:30-17:30、④貸出不可、閲覧のみ 講師派遣…①国内外の難民問題、②関西支部職員、③無料（但し事前事後授業実施の場合）、④西日本 問い合わせ先…①中尾、②email: nakao-s@rhq.gr.jp</p>	
<p>（財）神戸YMCA http://www.kobeymca.or.jp/</p> <p>〒650-0001 神戸市中央区加納町2-7-15 Tel078-241-7201 email: houshi@kobeymca.or.jp 月～金 9:00-17:30 世界123の国と地域に展開する世界最大のNGO、YMCA。神戸YMCAでは「いのちと平和」をテーマに、幼児、児童、青年、成人、高齢者等、多様な人々と共に国際交流、国際教育、国際協力・ボランティア活動を通じ、世界へ開かれた態度と行動力を養成する「教育的」ねらいをもった活動を行っています。</p> <p>セミナー等…開発教育研究会、平和を創り出す集会、神戸市民エイズ講座 資料室…①開発教育、平和教育など各分野 ②約200冊、③月～金 9:00-17:30、④貸出不可、閲覧のみ 講師派遣…①開発教育、平和教育、エイズ教育 ②国際・奉仕センター職員、国際ボランティア、③有料、④原則として兵庫県内 問い合わせ先…①遠藤、②email: hendo@kobeymca.or.jp</p>	

多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー

基調講演「開発教育・国際理解教育で何ができるか」

藤原孝章@同志社女子大学現代こども学科教授

日本国際理解教育学会・(特活) 開発教育協会・(特活) 多文化共生センター理事

email:tfujiwar@dwc.doshisha.ac.jp

講演記録要旨

1. はじめに

私は、兵庫県の報徳学園中・高校で長く教員をしておりましたので、先生方とは講師というよりも同僚の立場に近いと思います。JICAとは、前任の富山大学教育学部におりましたときに開発教育・国際理解教育で一緒にしておりました。神戸YMCAでは、私の開発教育へのきっかけとなりました「アジア大好き先生」のプログラムに加えていただきました。難民事業本部は、ご担当の中尾さんをとおしてよく存じ上げています。このように、4つの主催団体と関わりがあって、今日の日になったのではないかとっております。

2. 国際理解をめぐる言説

国際理解に関する立場や視点、考え方は、多くあります。皆さんが社会科の先生なら、国際理解といえば、「国際関係・国際問題」を、英語や国語の先生なら「文化理解やコミュニケーション」が中心だと思っておられるかもしれません。一方、学習指導要領などでは、「自国と他国」「日本文化と外国文化」という二項対立として国際理解を考えています。更には、「総合学習」に見られるように、「コミュニケーションとしての英語活動」に取り組む事例も大変多くなっています。一方、JICAでは「国際協力・開発教育」の文脈で国際理解をとらえています。学校教育などで語られる「異文化理解」と、本日のセミナーのタイトルにもなっていますが、人権教育や市民団体が語る「多文化共生」という言葉もあります。

国際理解にはこのように実に多様な言説があります。私は、今日の地球社会の現状や地球的課題の広がり・大きさを考慮して、国益だけではなく人類益をも考えられるような地球市民を育てる教育を国際理解教育の目標として掲げるべきだと考えています。したがって、その内容も、文化、地球社会、地球的課題といった広い領域を持った学習としてとらえるべきだと思っています。市民性の育成を重視するという意味で、「未来」の領域も大切です。

3. 開発教育の考え方

では、開発教育の特徴は何でしょうか。私は、開発教育では、地域と世界、ローカルとグローバル、過去、現在、未来といった時間、食べ物と世界というように、つながりや相互依存の認識、気づきを重視します。それだけではありません。例えば、JICAのピーストックマラソンのポスターには「1歳の誕生日を迎えられない子どもがいます」「1杯の水が飲めない子どもがいます」「1個の地雷で未来を奪われた人がいます」「1冊の教科書もない学校があります」「1本の苗木からはじまる森があります」といったものがあります。

これらは、たとえば、栄養や食料、衛生や保健、平和や紛争、学校や教育、環境などについて語っています。これらはなぜ平和と関連するのでしょうか。平和はなにも戦火が止むことが平和ではありません。「人間の生存、生活、尊厳を脅かすあらゆる種類の脅威を包括的にとらえていく」という人間の安全保障という考え方が大切です（UNDP 国連開発計画）。地球的課題が相互に依存し、その課題解決こそが平和につながっているのです。平和構築の考え方と通じるものですが、開発教育では、このように地球的課題をとらえ、その解決に取り組んでいくものです。

もうひとつ、開発教育の特色をあげますと、それは参加型学習、エンパワーメントということです。みなさん、困るという字をよくながめてみてください。四角い囲いをとると木だけになります。木は囲いをとられてすくすくと伸びます。インド出身のアマルティア・セン（1998年ノーベル経済学賞受賞）は、人間開発の概念を提唱した人で有名ですが、彼は、貧困を経済的なものさしではなく、「人間の選択可能性の機会が剥奪された状態」としてとらえています。したがって、開発教育は、選択可能性の機会

を奪われた人々が、自らの可能性を引き出し、よりよい状態へと高めていく、世の中を変えていく、力を付けていく教育だということもできるでしょう。そのための方法として参加型学習があるともいえます。

参加型学習は、活動的な手法のみが強調されていますが、それだけではないのです。たがいに学びあう学習であり、そして自らが地域や社会に参加・参画する学習であります。開発教育の文脈でとらえれば、参加型学習は、「自ら学び、自ら考える力」（生きる力）をつけようとする先進国の子どものためだけではなく、開発途上地域の人々のものでもあるのです。いやむしろ、開発途上国の参加型村落開発に多くを学んでいるといったほうがいいでしょう。

4. 多文化共生を考えるために

つぎに、多文化共生について考えるところを述べてみたいと思います。ここで、多文化共生を考えるための教材をご紹介します（藤原孝章原著・監修『ひょうたん島問題-多文化共生をめざして-地球市民教育参加体験型学習 CD-ROM 教材（テキストパック）』デジタル・マジック、2000年）。CD-ROMを使いパソコン画面で見て学習していきます。教師用のマニュアル・授業のすすめ方もパックに入っています（以下、プロジェクターにて「ひょうたん島問題」をプレゼンテーション）。「ひょうたん島問題」は、基本的には、ホスト社会にゲストグループの集団が移り住んでくるなかで、社会が多民族化し、それにつれて、あいさつ行動や行事、学校や住宅地域において、文化的な摩擦や社会問題が起きてくるといった現実を仮想化したものです。ロールプレイとランキングを使って、問題解決を探っていくという意味で、シミュレーション教材になっています。現実の問題と交差させながら使っていただくと参加型学習の成果がよりあがるものと思います。

「ひょうたん島問題」では、問題解決を考えていく場合の、文化に対する立場や価値観を4つに分け、文化や民族関係を考えられるようにしています。1つは多数派による同化の立場、2つには、それに反発し、少数派の違いを強調する立場、3つには、民族よりも個人としての人間の普遍性を重視する立場、4つには、違いへの権利を求め、集団としての少数派を擁護する立場です。こういう立場にもとづいて社会問題を考えるロールプレイのシナリオを創っています。小学生には難しいですが、中学生以上だと十分に使えますので、ぜひご利用ください。

現実の多文化共生の課題に関して、私がいいたいことは、グローバルとローカル、歴史と未来といった2つの軸でとらえた全体的な見方であり、ローカルな課題はグローバルな動きと無関係ではない、むしろつながりがあるということです。これを、ブレインストーミングやウエビングという参加型学習の手法を使って見取り図を作っていきますと、在日外国人をテーマにした学習課題のようなものが見えてきます。

5. 実践へのサポート

最後に、日本国際理解教育学会の授業実践記録収集への取り組みを紹介して終わりたいと思います。学会では、現在、国際理解教育のカリキュラム開発に取り組んでいます。そのなかで、先ほど申し上げましたように、目標や学習内容の枠組みができて参りました。これからは、そのような構想的な学習プログラムの枠組みの中で、学校の先生方がどのような授業や取り組みが可能なのか、あるいはすでに実践をお持ちの先生の授業は、その中にどう位置付けられていくのかを探っていこうとしています。

説明が十分ではないのでわかりにくいところもあったかと思いますが、参考文献なども示しておりますので、具体的に教材などをご覧下さい。また、今日、明日の分科会では、具体的なアクティビティも体験できますので、ぜひこの2日間で研修を深めていただければ幸いです。ありがとうございました。

参考文献（単行本・邦文・翻訳のみ）

- ・ Simon Fisher & David Hicks, 国際理解教育・資料情報センター編訳『WORLD STUDIES-学びかた・教えかたハンドブック』めこん, 1991年。
- ・ Graham Pike & David Selby, 中川喜代子監訳・阿久澤麻理子訳『地球市民を育む学習』明石書店、1997年)
- ・ David Hicks and Miriam Steiner、岩崎裕保監訳『地球市民教育のすすめかた』明石書店、1997年。

- ・ 多田孝志・櫻橋賢次『小学校ユニセフによる地球学習の手引き』教育出版、1997年。
- ・ 金沢孝・渡辺弘『中学校ユニセフによる地球学習の手引き』教育出版、1997年。
- ・ 『子どもの権利条約カードブック』ユニセフ、1997年
- ・ 『ユニセフと世界のともだち』ユニセフ、2002年
- ・ 『地球のともだち ユニセフワークブック』ユニセフ、2002年
- ・ 『「総合的な学習の時間」とユニセフ』ユニセフ、2001年
- ・ 『ユニセフの開発のための教育』ユニセフ、1998年
- ・ 『世界子ども白書』ユニセフ、年次版

- ・ 大津和子『国際理解教育-地球市民を育てる授業と構想』国土社、1992年
- ・ 大津和子・溝上泰編『国際理解重要用語 300の基礎知識』明治図書、2000年
- ・ 藤原孝章『外国人労働者問題をどう教えるか-グローバル時代の国際理解教育』明石書店、1994年
- ・ 藤原孝章原著・監修『ひょうたん島問題-多文化共生をめざして-地球市民教育参加体験型学習 CD-ROM教材(テキストパック)』デジタルマジック、2000年
- ・ 米田伸次・大津和子・田淵五十生・藤原孝章・田中義信『テキスト国際理解』国土社、1997年
- ・ 佐藤郡衛『国際理解教育-多文化共生のための学校づくり』明石書店、2001年
- ・ 開発教育推進セミナー編『新しい開発教育のすすめ方』古今書院、1995年(改訂新版99年)
- ・ 開発教育研究会編『新しい開発教育のすすめ方2 難民-未来を感じる総合学習』古今書院、2000年

- ・ 開発教育協議会編『わくわく開発教育』開発教育協議会、1999年
- ・ 開発教育協議会編『いきいき開発教育』開発教育協議会、2000年
- ・ 開発教育協議会編『つながれ開発教育』開発教育協議会、2001年
- ・ 開発教育協議会編『開発教育キーワード51』開発教育協議会、2002年
- ・ 国際協力推進協会編『開発教育・国際理解教育ハンドブック』(財)国際協力推進協会、2001年 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sanka/kyouiku/handbook/index.html>
- ・ 開発教育協会編『開発教育教材カタログ』開発教育協会、2003年

関連 site

- ・ 開発教育協会 DEAR: <http://www.dear.or.jp/>
- ・ 多文化共生センター: <http://www.tabunka.jp/>
- ・ JICA国際協力機構: <http://www.jica.go.jp/Index-j.html>
- ・ 日本国際理解教育学会: <http://www2.ocn.ne.jp/~kokusaig/>
- ・ 異文化間教育学会: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/iesj/>

セッション1 人権・多文化共生 a. 多文化共生のまちづくり

1. テーマ

「共に生きる社会をつくるために」

2. ファシリテーター氏名・所属

岩山 仁 ・ 多文化共生センターひょうご

3. プログラム内容

ね ら い		
「多文化共生」を阻害する「ことばのカベ」「制度のカベ」「こころのカベ」について知り、「多文化共生する社会」をつくるために必要なことについて、アクティビティによる擬似体験を通して気づき、考えてもらうことをねらいとする。		
準備するもの		
1. OHP, 2. ホワイトボード, 3. 移動可能な机と椅子, 4. A4 白紙(参加人数分), (以下別添) 5. レジューメ, 6. 参考資料 * アクティビティで使用するシール及びカードはこちらで準備致します。		
時間	すすめ方	留意点
15:00 15:10	1. 講師自己紹介および在日外国人をとりまく概況について	★OHP を使用します。
15:10 16:00	2. ことばのカベ ★ アクティビティ 1 「自己紹介シート」 ★ アクティビティ 2 「シールでグループ分け①」 ★ アクティビティ 3 「バルンガ」(カードゲーム)	「自己紹介シート」作成中に、参加者の背中にシールを貼りますので、どなたかお手伝い頂けると助かります。 また、「バルンガ」のときには机を移動してグループごとに座ります。 ★OHP を使用します。
16:00 16:10	3. 制度のカベ 4. こころのカベ	★OHP を使用します。
16:10 16:50	5. ちがいと共生 ★ アクティビティ 4 「アイデンティティの分子」 ★ アクティビティ 5 「シールでグループ分け②」 ★ アクティビティ 6 「口に 2 本くわえると？」	「アイデンティティの分子」作成中に、再び参加者の背中にシールを貼りますので、どなたかお手伝い頂けると助かります。 ★OHP を使用します。
16:50 17:00	6. 豊かな「多文化共生社会」を実現するために (まとめ)	
発 展		
参考資料及び関連ホームページからの学習		

表題・簡単な内容・参加者の反応・参加者の意見など

セッション1 a, 多文化共生のまちづくり 講師：岩山 仁

- 自己紹介 最初は各自自由に動き回っている人々に挨拶 「こんにちは」 e t c , , ,
次に「握手してください」⇒自由に動いて盛りあがる。
次に「ハグしてください」⇒少しひき始める。
次に「ロシア式に抱き合ってキス」⇒冷ややかな反応、戸惑う。

・自己紹介シート：紙の真中に氏名を書いてその周りを4つに区切り左上に「私は～です」、左下に「私は～の一員です」、右上に「外国で私は～です」、右下に「今の元気度」を書いた。
- 背中にシールを貼った状態でグループ分けを行う。言葉を使ってもいけないのでジェスチャーで伝えなければならない。OK サインや NG サイン、を使ったり誰かが引き合わせたりしていた。集まるのに最初は時間がかかった。
- じゃんけんをグループ内で全てそろえるというゲーム。速いグループは二回目で既にそろっていた。それは誰かがリーダとなり1回目に次に出す手をみんなに示していた。3回目には全てのグループでそろった。
- 「バルンガ」というカードゲーム。言葉を使ってもいけない。勝った者と負けた者はグループを移動する。その際、グループごとにルールが微妙に違っていたので、移動した人は何かおかしいな、と思いながらもプレーを続けていた。そのときに、「それは違う」という意見を全体に出すことが出来ない人が多かった。また、ルールが違うということに気づかない人が半数以上いた。
自分たちの共通のルールを覚え(=文化習得)、それが「当たり前」「正しい」と思い込み、相手が違うことをしたときに、「変だ」「間違っている」と思ってしまうところから「異文化摩擦」が生じるのである。
- もう一度シールでグループ分け。今回は変わった形(半分づつ色が分かれている、など)のシールがありそれらの人々は自然に少し違うもの同士で集まった。
黄色と青のシールの人は黄色グループにも青グループにもいれてもらえなかった。どちらのグループも悪意があってその人を排除したわけではないが、結果的に排除してしまうことになった。
そのような「無意識の排除・差別」が社会的マイノリティを生み出し、「気がつかないということ」がその立場の人たちを辛い環境に陥れているという現実がある。選挙を始めとした「多数決」「マジョリティ本位」の社会では、少数派の意見は社会から無視されてしまうことがほとんどである。
だからこそ、マジョリティ側の人間が、そのことに「気づき」、従来の社会的な枠組みを超えて考え、行動することが、「多文化共生のまちづくり」につながる第一歩なのだ。

考察

いくつかのグループワークを通して参加者は、自分自身が知らず知らずのうちに生みだされる人権侵害を体験した。グループワークの中で様々なグループが形成される過程において、差別や排除の意識がなくても、結果としてその要素にあてはまらない人を排除してしまっているという自分自身に気づいた参加者も多かった。
しかし、我々の生きる社会において、同質や均質を求めるだけでは豊かな社会は実現されない。違いを認め、互いを尊重し、その違いから学ぼうとする態度の大切さに参加者は気づいていった。
私たちはマイノリティの立場におかれ、自分の意見を言うことすらままならない状況におかれている人がいることを忘れてはいけない。どこにも属することが許されない人たちがいることを忘れてはいけない。
そしてその人たちと共に社会を変え、誰もが暮らしやすい社会を築こうとする取り組みをしなければならないというファシリテーターのメッセージをしっかりと心に受け止めてくれたようだ。

1. テーマ

「多文化共生の学校づくり」

2. ファシリテーター氏名・所属

綿巻秀樹・川西市立加茂小学校

3. プログラム内容

ね ら い		
<p>現在、日本語指導を必要とする在日韓国・朝鮮籍の子どもや南米、東南アジアなどの国から来た子どもたちが在籍する学校が増えてきています。「いろいろな文化背景や言語等の異なる児童生徒が、共に学ぶことのできる学校」とは、どんな学校でしょうか。「違いが違いとして尊重され、学ぶ権利が保障されている学校」とは、どんな学校かを考えてみよう。</p>		
準備するもの		
<p>各グループに 模造紙 1枚 附箋 1冊 マジック数本 ※ 現在、外国籍の子どもが在籍している学校やそうでない学校。日本語指導が必要な子どもや複数の国籍の子どもが在籍する学校というように、現在置かれている状況により学習者が持つ情報量が異なる。そのために、学習者の状況により必要とされる情報を事前に提供する必要がある。</p>		
時間	すすめ方	留意点
	<ol style="list-style-type: none"> 1 学習のねらいを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「多文化共生」とはなにか。 ・人権が尊重されている学校とは。 2 文化の違いや言語の違いにより起こる不便なことや不都合なことを出し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・不便なことは何か、不都合なことは何か。 ・差別や偏見の存在にも気づくことが大事。 3 不便なことや不都合なことを取り除くにはどうすればいいか。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分ができること、学校としてできること、地域でできることなど 4 3での意見をもとに、「多文化共生」の学校を作りましょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・どんな、勉強や行事があるといいか（カリキュラム上で）。 ・マイノリティーへの配慮としては、どんなことがなされるべきか。 ・マジョリティーとしての配慮には、どんなことがあるのか。 ・学校でできる支援、地域、家庭での支援はどんな支援か。 5 まとめ <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの「多文化共生」の学校を発表し、他のグループの考えた学校との違いや共通点を確認し、「多文化共生」の学校づくりをまとめる。 ・異なった文化を持つ人たちと、共に学び、生活することのよさに気づき、「共生の心」を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生 ・子どもの権利条約について触れる <p style="margin-left: 20px;">2、3については、グループでブレインストーミングをおこなう。（自由な発想で）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的にまとめる場合には、左記の視点を提示して、2、3での意見を参考にまとめるようにする。 ・多文化共生の視点を確認しながらまとめていく。
発 展		
<p>学習者によって、本ワークショップの扱い方に大きな差がでてくると思われる。学習者が低学年の場合は、「学級づくり」という視点で展開してもよいだろう。また、外国人児童生徒が在籍する場合とそうでない場合も、具体的な手だてに差が出てくる。外国人児童生徒を受け入れる前とその後でも意見が違ってくるだろう。1回きりの課題とするのではなく、子どもたちの発達段階に合わせ、再び学習することで、新たな「多文化共生」の学校を作り出していくことにもつながるであろう。</p>		

時間	表題・簡単な内容・参加者の反応・参加者の意見など
15:10	<p>参加者人数：約60名（内、約9割の参加者が身近に外国籍の人がいると手を挙げた。）</p> <p>1、「ディスクリマドット」アイスブレーキング 静かだが、参加者の表情がゆるむ。 集団に属した感想をファシリテーターが尋ねると笑いが出るなど、和やかな雰囲気。マイノリティーは「不安だった」、マジョリティーは「仲間がいて安心した」の感想。</p>
15:28	<p>2、兵庫県の外国人児童生徒の現状 統計の資料に興味深く見入る様子が見られる。</p> <p>3、外国人児童生徒にかかわる教育指針 内容について熱心にメモをとっている様子が見られる。</p> <p>4、多文化共生の学校づくり 6グループ（1グループ 8名～12名）</p>
15:50	<p>①ポストイットに「こんな学校があったらいいな」を書く（10分） 熱心に取り組む様子が見られたが、ペンが止まりがちの参加者もいる。取り組むスピードに個人差がある。</p> <p>②アドバイス「自分がマイノリティとして学校に行った時のことを想像して見て下さい。」</p> <p>③自己紹介とともにグループ内で意見交換、班で模造紙にまとめていく。 全体的に声は低く、静かな雰囲気で作業が始まる。外国籍の児童生徒をもつ先生方からは、実体験に基づき問題点が指摘された。立ち上がって模造紙に分類しているグループには笑い声も出る。残り時間15分というアナウンスによりペースアップ。すべての班が活気づき、班ごとの「多文化共生の学校」をまとめるため、皆が積極的に意見を交わす。</p>
16:30	<p>④グループ発表</p> <p>1班：「めざせ、多文化共生学校」 校内の表示や配布物の多言語化、小人数クラス、世界の行事、保護者向け日本語教室、選択授業（教師も選べる）、母語指導、常勤言語サポーター、進路や遊びのサポーター（生活面でもサポートを！）</p> <p>2班：「共に生きる」 バイキング形式給食、多言語学習、自国文化の学習、カウンセラー、保護者や地域のコミュニティづくり、細かい校則なし、多文化学校行事</p> <p>3班：「どんな人が来ても受け入れる学校」 なかまづくり、開かれた学校、文化交流の場や時間、家庭教師、スタディーツアー（全員がマイノリティーを経験）</p> <p>4班：「違いを認め合う学校」 学校方針に明記、家族がいつでも相談できる部屋 同時通訳の機能、インターネットの効果的利用、自分たちの当たり前を見なおす、個人のニーズに合った行事やカリキュラム、本名を堂々と名乗れる環境</p> <p>5班：学生・地域ボランティアとの連携、文化交流、アートでつなげる</p> <p>6班：専門家スタッフ（日本の教育事情を知っている人で日本語指導の専門家）、学校の概念（戦前の学校教育）の見なおし、自分の居場所が感じられる場所の確保、親土士の連携</p> <p>5、質疑応答、まとめ</p>
16:55	<p>静かに聞き入る様子が見られた。</p>
考察	
<p>本セミナー参加者の大半は、外国籍の児童生徒を抱える教員であったようだ。ワークショップでは、理想の学校について考えるだけでなく、現場で抱えている問題やそれらに対する取組についての意見交換が積極的に行われた。「もう少し議論を深めたかった」という要望も見られたが、発表の内容はどの班もよくまとまっていたと思われる。ワークショップ中のファシリテーターのワークショップ中の巡回やアイデアが出にくそうな時の適切なアドバイスなどが効果的であった。</p> <p>発表では非常にユニークなアイデアが多数出ていた。常勤の言語サポーターの充実、給食のバリエーションの追加、校則の見なおし、多文化多言語教育、学校行事の多様化、外国人児童生徒が安心して登校できる学校環境整備などは、どの班でも指摘された。また現状の言語サポーターが常駐でなく時間的にも制約があること、ボランティアの仕事依頼に遠慮してしまうことなど、現場の声も出ていた。ワークショップで「理想の学校像」を考えることが、自由で独創的な発想を生み出していた。</p>	

1. テーマ

「熱帯林をめぐる開発と私たちの暮らし」

2. ファシリテーター氏名・所属

荒川共生（開発教育協会大阪事務所）

3. プログラム内容

ね ら い		
熱帯林をめぐる開発の問題は、私たちの暮らしと綿密に関っている。ワークショップを通して熱帯林とのつながりに気づき、またそのつながりの先で起きている先住民族を取り巻く問題について学び、その解決に向けて何ができるのかを考える。		
準備するもの		
スライドプロジェクター、スクリーン、ホワイトボード、A4の紙		
時間	すすめ方	留意点
5分	1) はじめに あいさつ、自己紹介、今日の流れ、ワークショップとは。	参加型についての説明 緊張をほぐす、問題意識の共有
10分	2) アイスブレイク お互いを知る、今日期待すること、熱帯林のイメージ	
20分	3) ワークショップ「熱帯林探検隊」 モノを通して熱帯林に暮らす先住民族の暮らし、知恵を学ぶ。	
30分	4) ワークショップ「生活の中の熱帯」 モノを通じて考えると熱帯林は身近で不可欠な存在である。 熱帯林に暮らす先住民族にとっても熱帯林は不可欠である。	
20分	5) スライド「熱帯林と私たちの暮らしとのつながり」 写真を通して具体的事例を学ぶ。	
30分	6) ワークショップ 「ランキング アブラヤシを取り巻く問題を解決する方法」 私たちに何ができるのか、考える。	
発 展		

表題・簡単な内容・参加者の反応・参加者の意見など

セッション2 a. 熱帯林をめぐる開発と私達のくらし 講師：荒川共生

「アイスブレイク～お互いを知る～」

1枚の紙を4つに折って、

①名前と所属 ②今日来た理由

③熱帯林のイメージ ④熱帯林のある国 を書いていく。それをグループ内でシェア。

①	②
③	④

各グループから出た熱帯林のイメージ

●豊かな自然、たくさんの動物、多種、知識をもった人々、湿気、神秘、人間の搾取、雨が多い、暑い、急激に減っている、酸素、マイナスイオン、大きな直径、樹木の成長が早い、ジャングル、いやな虫がいる、先住民がいる、先進国の搾取、動物・人間・自然が共生、人間が短命、仕事・学校がない etc.

→参加者の中からは、日本にも熱帯林があるのではないかと、という意見も出ていた。イメージでは、搾取、ということと大自然である、ということがどのグループからも出ていた。文明が未発達であるという意見も出ていた。

「ワークショップ～熱帯林探検隊～」

○サラワクの民芸品や日常使われている実物を手にとって、何のための道具か考察し、熱帯林で暮らす先住民族の文化をモノを通して理解し共感する。なんとなくわかるものから全くわからないものもあり、参加者は自由に想像していた。

食物からとれた塩、イヤリング、鉄木（水に沈む）、稲刈りの道具、鉄製のはさみ、旧日本軍のお札（軍票）、木材につけるタグ、お菓子を造る道具、こしょう

「ワークショップ～生活の中の熱帯～」

物品リスト（91項目）を見て、これがないと不便である、または生きていけないものを個人で10個選び、その後グループで6個に絞り込む。

→酸素、鉄、トイレトペーパー、石油という意見が多かった。いずれも生活に欠かせないものであり、これらがなくなってしまうとはどうにも生活できない、という意見が多く出た。これらは、マレーシアの熱帯林から作られているものであり、生活に不可欠なものが多い。また、熱帯林はそこに暮らす先住民族にとっても不可欠なもので、日本に熱帯林保護を訴えにきたサラワクの先住民族が、「なぜ日本人は国内にこんなに木があるのに、サラワクの木を伐採するのか」と訴えたと言う。

「スライド～日本と熱帯林のつながりについて～」

熱帯林は距離的には離れているが、モノを通して考えるとつながりが深い。日本とのつながりとして森林伐採はよく知られているが、パーム油についてはつながりが見えにくい。日本では「地球にやさしい」として売り出されている日用品だが、実際はアブラヤシ農園開発が、熱帯林を破壊し、先住民族の暮らしに大きな影響を与えている。これが本当に「地球にやさしい」のだろうか？

考察

生活のさまざまな部分にまで熱帯林を資源とする日用品出回っていることに参加者からは驚きの反応があがっていた。

セッション2 貧困・開発 b. 貧困の原因はどこに

1. テーマ 「できるだけ稼ぎましょう」から考える

2. ファシリテーター 藤野 達也/PHD 協会・関西 NGO 協議会・開発教育協会

3. プログラム内容

ね ら い			
世界の構造を考える。			
準備するもの			
説明シート、ホワイトボード、紙片40枚			
時間	すすめ方	留意点	
0分	① 4班に分ける。	必要以上にならない。 盛上げるため にあおる。	
10分	② アクティビティの目標を説明する。「できるだけ稼ぐこと」 ③ ルール説明 ～シートどおり～ アクティビティ		
45分	④ 各班の得点集計 ⑤ ふり返り ～インタビュー～ 1) 感想 2) 進行中のトピック 3) 実社会への反映		
60分 ～ 90分	⑥ 解説 貧困の原因		
発 展			
世界の貧困の原因がどこにあるか考え、その上でその解決に何が必要か、何をなすべきかを考える。			

1、ファシリテーター挨拶、PHD協会説明

2、地球上の問題にはどのようなものがある？

一人ずつ参加者がマイクを持ち、地球上の問題をキーワードで述べていく。静かに他の参加者の発言に耳を傾ける様子。

3、ファシリテーターによる参加者発言の総括（貧困、医療保健、戦争、環境、人権）

4、ワークショップ「できるだけ稼ぎましょう」（8グループにわかれる）

静かにワークショップがスタートする。配布プリントのルールを真剣に読む姿やグループ内で小さな声で相談する人もいる。ゲームが開始すると次第に笑い声もでて、活気付いてくる。

代表者会議・・・各グループ代表による活発な討論が室外でされる。個人の利益と全体の利益についての討論がさかんに行われる。次回の策略（例：次はみんなでYを出そう）なども練られる。

全体会議・・・非常に盛り上がる。大きな声で笑う人、提案をする人などが出てきてとてもにぎわっている。冗談をかわしながらの陽気な討論が繰り広げられる。（例：みんなで決めたことを裏切った班がいる！提案があります、みんなで仲良くYを出そうよ。みんなを信じましょう）

5、ゲームの振り返り、感想、考察

ゲームの興奮冷めやらぬ様子。参加者全員とても真剣に発言し、盛り上がりを見せる。班同士で「裏切ったなー」とか「約束したのに」とか責め合う様子も見られる。

—感想—

稼いだ班・・・基本方針を貫いた。人生の勉強ができた。グループ内で意見が分かれることもあったが、班の利益のために私が悪役になった。他の班の犠牲になろうという人は班内で1人しかいなかった。もう少しもうけようと思ってXを出した。裏切りを予測した、複雑な気持ちだ。

損した班・・・裏切られた。信じたのに・・・。損をしても金持ち班が援助してくれると信じていた。

—考察 現実社会において、このゲームで見られるようなことがおこっているか—

植民地時代の帝国主義的考え方は、強者が弱者を利用して富を得ようとする考え方が働いており、このゲームで見られる現象に似ている。

話し合いで力のある人が自分たちだけが儲かろうとしている現象は、実社会にもある。

6、まとめ

ゲームの限界、開発教育におけるゲームの活用法、貧困のメカニズムの解説、国際協力のあり方についてファシリテーターが解説

興味深そうにメモをとったり、ファシリテーターの意見にうなずき賛同する様子の参加者もみられる。

考察

参加者人数：40数名 貧困という大きな漠然としたテーマを考えるこのセミナーで、ゲーム「できるだけ稼ぎましょう」は大きなインパクトを参加者に与えたようだ。参加者のゲームの参加ぶりは大変熱心で、かつ盛り上がりも相当なものであった。ゲームを時間刻みで上手く進めている点も、ワークショップ全体のめりはりをつけるという点で良かったと思われる。また現実問題を扱う開発教育において、ゲームの活用は効果的ではあるが、ゲームの限界にも留意する必要があるという解説も有意義であった。貧困というテーマから国際協力援助のあり方を最後に問いかけるという場面もあり、内容の濃い、刺激的なワークショップであった。

セッション3 平和 a. 平和はいかにつくられるか

1. テーマ

平和はいかに作られるか

2. ファシリテーター氏名・所属

高野剛彦・神戸市立六甲アイランド高校

3. プログラム内容

ね ら い		
<p>日本では戦後一貫して「平和教育」が行われてきた。しかし、それが世界で現実に行っている戦争や紛争とどのように結び付けて語られてきただろうか。ともすれば他人事になりがちな問題に対し、私たちはいかに主体的に取り組むことができるのかを参加者とともに考えていきたい。</p>		
準備するもの		
<ul style="list-style-type: none"> ● B4の紙9枚×グループ数（1グループ6人） ←「戦争の作り方」 ● 役割シート（意見シート）×グループ数（1グループ6人） ←「パレスチナ問題ロールプレイ」 		
時間	すすめ方	留意点
0分	<p>アクティビティ1「部屋の四隅」</p> <p>次の2つのテーマについて、部屋の四隅に分かれて意見を述べあう。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① サッカーのアジアカップで中国が日本選手にブーイングしたのは仕方のないことだ。 ② 世界にはあまりにも理不尽な不正義が行われているから、正義のためには暴力も許される。 	<ul style="list-style-type: none"> ● まずそれぞれの意見ごとに理由を確認した後、4つの意見を混在させたグループを作り、お互いの主張・根拠を聞く。 ● 各役割の意見・主張は以下の通り ①「罪のない人を標的とするテロ事件は防止しなければならない」 ②「イスラエルに対するテロ攻撃に反撃し、テロ組織を壊滅しなければならない」 ③「戦争は無実の人々を苦しめる悪であるから、すぐに中止すべきである」 ④「テロへの報復はその報復を呼ぶだけであり、イスラエル軍による報復攻撃には反対である」 ⑤「侵略行為を止めないイスラエルに対して徹底的に戦う」 ⑥「イスラエル軍や市民に対するテロは、イスラエル政府への不信の現れである」 ● このロールプレイは京都教育大学野村助教授のHPから引用させていただいた。 ● 「戦争の作り方」はりぼんぷろじえくとこの作品で、以下のアドレスから無料ダウンロードできる (http://www.ribbon-project.jp/book)
20分	<p>アクティビティ2「パレスチナ問題ロールプレイ」</p> <p>6人1組のグループに分かれ、6つの役割になりきってパレスチナ問題の解決方法について話し合う。6つの役は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① イスラエル市民：アン・マトニヤフ（48歳）女性 ② イスラエル軍の軍人：オットー・シャミル（32歳）男性 ③ 日本の中学2年生：鈴木絵里香（14歳）女性 ④ 日本の教師：太田典子（47歳）女性 ⑤ パレスチナの解放組織のハマスの一員：フッサム・ハダー（24歳）男性 ⑥ パレスチナ住民：ハムザ・ムハマド（58歳）男性 	
80分	<p>アクティビティ3「戦争の作り方」</p> <p>6人1組のグループに分かれ、次の2つのワークを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 9つの書き出しに続く文章を考える。 ② できあがった9つの文章を並べ替えて、「戦争の作り方」を完成させる。 ③ どうやったら「戦争への流れ」を止めることができるのか、グループで話し合う。 	
発 展		
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 「総合的な学習の時間」で「戦争の作り方」を学習し、そこから発展させて「平和の作り方」を生徒たちに話し合わせ、絵本作りをするというプロジェクトが考えられる。 ◆ ロールプレイは今回紹介した「パレスチナ問題」以外にも日米原爆論争（神戸開発教育研究会が1995年に作成したもの）等がある。また筆者は選択科目「時事問題」で、「アフガン戦争」や「自衛隊イラク派遣」をテーマに役割だけを生徒に示し、役割シートの作成とロールプレイを行わせた。 		

表題・簡単な内容・参加者の反応・参加者の意見など

セッション3 a. 平和はいかにつくられるか 講師:高野剛彦

・ワークショップ「部屋の四隅」2つのテーマについて4つの意見に分かれる。

①サッカー・アジア杯での日本パッシングはいけなことだと思う。

賛成・1 やや賛成・7 やや反対・1 反対・1 (数字は割合)

出た意見

- 歴史を考えれば当然。報道が悪い。(反対)
- スポーツの場ではやめるべき。あれで問題が解決するわけではない。(賛成)
- 中国の教科書を見ればそうなるのは仕方ない。中国国内の教育が悪い。(やや反対)
- サッカーの場で表現するべきではない。マナーに反すること。中国の人がただしく歴史認識をしていない。(やや賛成)

②世界には悲惨な現実があって不正義がまかりとおっているのでその不正義に対抗するために暴力は許される。

賛成・1 やや賛成・0 やや反対・1 反対・8

出た意見

- 平和な状態を維持するためには暴力とはいかなくても武力行使は必要である。(賛成)
- 暴力的な要素を排除した、抵抗には正当性があるのではないか。(やや反対)

次に②の「暴力」という言葉を「抵抗」という言葉に置き換えてみると・・・。

賛成・6 やや賛成・2 やや反対・1 反対・1

→言葉を変えるだけでこれだけ反応が変わるということは、暴力という言葉に関して攻撃者側の認識、抵抗という言葉に防衛的な認識があると思われる。

・ロールプレイ:パレスチナ問題

6人1組になって、グループごとに6つの役割があるのでそれぞれの役になりきってパレスチナ問題について話合う。

役割は、①イスラエル市民②イスラエルの軍人③日本の中学2年生④日本の教師⑤パレスチナの解放組織のハマスの一因⑥パレスチナ市民の6つ。まず最初に役割ごとのグループに集まって、自分の立場はどういう意見なのかを確認しあう。そのあとまたグループに戻ってそれぞれの意見をぶつけあった。

→暴力はいけなことだとわかっていても、肉親が殺されたりしている側にとっては反抗することは当然であるという意見が出ていた。攻撃される側と攻撃する側、そして日本という第三者の全ての意見が違うので、結論が出たグループはなかった。

その後、もう一度

③パレスチナには悲惨な現実があって不正義がまかり通っているので、その不正義に対抗するために暴力は許される。

という質問をすると、 賛成・1 やや賛成・0 やや反対・1 反対・8

という結果になった。

- パレスチナに対する武力攻撃はむなしい。抵抗はひどすぎる(反対)。

考察

最初のアクティビティで日本語の表現が変わることで意見が変わる人が多かった。またどちらの立場でものごとを考えるかということでも意見が変わっていた。 **いけない→仕方ない** **暴力→抵抗** など

セッション3 平和 b. わたしが難民になったら

1. テーマ 「わたしが難民になったら」
2. ファシリテーター 中尾秀一（アジア福祉教育財団難民事業本部）
3. プログラム内容

ね ら い		
難民の定義、現状、発生から定住・帰還までの経緯など、難民問題の基本的な事柄を参加者自らがシミュレーションやグループ討議で考え、自分たちの持つ先入観に気づきながら、知識を習得していく。		
準備するもの		
「誰が難民か」シート、用紙（B5、各グループに5枚）、はかり（1kgまで）、米（5kg程度）、豆（1kg程度）、容器		
時間	すすめ方	留意点
50分	<p>1. 模擬授業</p> <p>①投票式クイズ「誰が難民か」－難民・国内避難民の定義、難民条約 5～10人の例が難民であるかどうか各自が考え、会場に掲示された用紙に記入する。</p> <p>②シミュレーション「何を持って逃げるか」－難民発生の原因、脱出の状況 難民となって逃げるときに何を持ち出すか、グループで3つ選ぶ。</p> <p>③ワーク「難民キャンプの食事」－キャンプでの生活（食事、住居等） キャンプでの食事量を実物の食品を使って予想する。</p>	
30分	<p>2. 振り返り～部屋の四隅</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の模擬授業を活用しようと思いますか ・どうすればもっと良い授業になるでしょうか 	
30分	<p>3. 応用例の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業の応用例 キャンプ・写真、誰が難民か（小学生版）、鞆と荷物 ・世界の難民はどこに（世界難民地図） ・船に乗って脱出する 	
発 展		
<p>参考文献 開発教育研究会編『開発教育のすすめ方2 難民』古今書院、2000年</p>		

1、難民とはどんな人？(○×で答える)

難民の定義について考える。会場内の壁に貼りつけられた紙の文章を読み、難民のことを述べていると思えば○を、そうでなければ×をつける。参加者はてきぱきと会場内の7枚の紙にチェックをいれる。

- ・隣国との戦争のため、戦火を避けて国内の他の村へ逃れた人…△(国内避難民)
- ・干ばつのために食糧が不足し、隣国へ逃げた人…○
- ・政府を批判する新聞を発行したために弾圧を受け、外国へ逃げた人…○
- ・自国が貧しいため、より良い暮らしを求めて外国へ移った人…×(移民)
- ・民族対立による内戦が激化したため、隣国へ逃れた人…○
- ・火山の噴火のために、自分の暮らしていた村が火山灰に埋まってしまい、隣国へ移った人…×
- ・留学中に政変があり、自国へ戻ると迫害を受ける恐れのある人…○

2、私が難民になったら？(グループワーク、5グループ)

「自分が難民だったとしたら、何を持って逃げる？2品あげて下さい」ファシリテーターの質問を受け、すぐに和やかな雰囲気の中グループディスカッションがはじまる。

グループ発表 各班とも「持っていく物」は食料、お金が多く、意見に統一性があった。

持っていく物:食料、お金(金)、家族写真、めがね、水

持っていくのを断念した物:パスポート(身分証明書)、ラジオ、衣料、薬、財産

発表を受けてのファシリテーターによる説明・解説、うなずき、興味深そうに聞き入る様子

3、難民キャンプでの食事はどんなもの？(グループワーク)

大人一人一日分の難民キャンプにおける主食の米と副食の豆の量を推測する。

難しそうに頭をひねらす人が多い。かなり少ない予想が目立つ。

ファシリテーターによる説明、解説、難民キャンプでの食糧事情に興味深く聞き入る。

4、以上のような内容の授業を、難民を知るとかかかりの授業としてやりたい？

「絶対やる」…0名 「やってみたい」…16名

「たぶんやらない」…6名 「絶対やらない」…0名

参加者コメント)この内容の授業をするには事前学習が必要だと思われる(中学教員)

子どもは自分の一日の食事の量にさえも実感がないので難民の食事量を推測できるのか？(小学校教員)

教科授業にどのように取り入れるかが課題。教科の横のつながりが必要(高校教員)

難民受入国側としての視点をもう少しいれるべきでは？

難民キャンプの生活紹介(スライドを用いて)真剣に見入る。

難民に関する授業展開の様々な教案、教材を紹介、メモを取るなどし、大変熱心に聞いている。

5、質疑応答

このような開発教育を実際に学校で展開するのは難しい(時間的、カリキュラム的な拘束がきつい)がどうしたらいいか。

日本(特に兵庫県)にベトナム難民が多いというが、そのことについて深く知りたい。

考察

参加者:22名 非常に和やかな楽しい雰囲気のもと、ワークショップはすすめられた。それはファシリテーターの参加者への問いかけが効果的であったからであろう。参加者からの発話も積極的にみられた。開発教育としていかに授業に取り組むかといった具体的、実際の内容にまで膨らませているこのワークショップは現場の教員の興味関心をしっかりとらえていた。教案や情報収集の場の紹介などもあり、とても有意義なワークショップであった。

表題・簡単な内容・参加者の反応・参加者の意見など

クロージングセッション 進行：中尾秀一

・グループごとに分かれて3つのテーマについて話し合ってもらった。

①多文化共生のために必要なものは何ですか？

- ・知り合うこと→認めあうこと もう一歩進んだ理解
- ・あるものを受け入れていくこと
- ・見えないものを見ようとする、人の話を聞くこと
- ・目をそらしたいことに目を向ける。
- ・「当たり前」の見直し、言語保証、制度の整備

②あなたは国際理解教育・開発教育をどのように実践していきますか？

- ・給食でアジアの料理を解説したりして、身近なところから「世界」というものに触れさせていく。
- ・自分たちの暮らしがどのように外国とつながっているかを理解する。
- ・この2日間で考えた自分の生き方を子供たちに伝えていく。

③このセミナーで得たものは何ですか？

- ・広い視野を持つということ
- ・人口の増大と環境破壊が両立できるものか？と今まで子供に聞かれて答えられなかった。しかし、このセミナーに参加して自分なりに「喜んで我慢する」という答えが出たのでそれをどんどん子供たちに伝えていきたい。
- ・現場で活かせるものを得た。
- ・国際理解というものを小さなことから取り組んでいく。
- ・視点を増やしていく方法
- ・新しい出会いが広がった。

考察

2004/08/16・17 多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー

アンケート集計結果

参加者数：16日 90人／17日 86人

アンケート（2日間で1回実施）回答数：47

1. プログラムについて感想をお聞かせください。

(1) 基調講演（講師：藤原 孝章）

イ：大変良かった	11
ロ：良かった	17
ハ：普通	15
ニ：良くなかった	1
無回答：	3

《コメント》

- ・ ひょうたん島の話子どもたちの反応も含め詳しく聞きたかった。
- ・ CD-ROM教材の活用法、授業の流れ等をもっと教えてほしかった。
- ・ 資料が見にくかったのが残念だった（1つだけ）。「ディスクリマドット」は興味深かった。マイノリティの気持ちを体験することでマイノリティへ目を向けるということ。シールをうまく使って子どもも楽しみながらできそう。
- ・ 分かりやすかった。
- ・ ひょうたん島のプログラムに興味をもった。
- ・ とても大切な内容ばかりだが、時間の関係でどれも短くなってしまったので、結果としてどれも十分に理解できなかった。
- ・ もう少し具体的な内容の話が聞きたかった。
- ・ CD・ワークシート関連の情報が手に入った。

(2) セッション1「人権・多文化共生」

<p>a. 多文化共生のまちづくり (講師：岩山 仁)</p> <table> <tr> <td>イ：大変良かった</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>ロ：良かった</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>ハ：普通</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>ニ：良くなかった</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>無回答：</td> <td>0</td> </tr> </table>	イ：大変良かった	10	ロ：良かった	6	ハ：普通	0	ニ：良くなかった	0	無回答：	0	<p>b. 多文化共生の学校づくり (講師：綿巻 秀樹)</p> <table> <tr> <td>イ：大変良かった</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>ロ：良かった</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td>ハ：普通</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>ニ：良くなかった</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>無回答：</td> <td>0</td> </tr> </table>	イ：大変良かった	6	ロ：良かった	14	ハ：普通	3	ニ：良くなかった	0	無回答：	0
イ：大変良かった	10																				
ロ：良かった	6																				
ハ：普通	0																				
ニ：良くなかった	0																				
無回答：	0																				
イ：大変良かった	6																				
ロ：良かった	14																				
ハ：普通	3																				
ニ：良くなかった	0																				
無回答：	0																				

※ a. か b. を選択しなかった回答のうち イ：大変良かった 2 ロ：良かった 1 ハ：普通 1 ニ：良くなかった 0 無回答： 4	
---	--

《コメント》

(a)

- ・ 時間が足りなかった。
- ・ ゲームとセッション内容が非常によく連動していて、すばらしかった。もう少し理念的なこと聞いてみたかった。
- ・ 時間が短く、十分に消化できなかった。ワークショップの振り返りが不十分だった。

(b)

- ・ 教育委員会がブースを持ったということがまずうれしい。もっと具体的な悩みを出し合っその解決方法を考える場になればもっとよかったと思う。例えば「子ども多文化共生センターを利用してみよう！」など。
- ・ 周りの方の意見を通して新たな発見もあり、現状が分かってよかった。
- ・ 時間が短かった。
- ・ 大勢の方々の様々な視点を知ることができてよかった。理想の学校づくりは楽しいものだったが、この中の職員として推進していく困難さにも気づかされた。

(3) セッション2「貧困・開発」

a. 熱帯雨林をめぐる開発と私たちの暮らし (講師：荒川 共生) イ：大変良かった 6 ロ：良かった 7 ハ：普通 0 ニ：良くなかった 0 無回答： 1	b. 貧困の原因はどこに (講師：藤野 達也) イ：大変良かった 19 ロ：良かった 8 ハ：普通 0 ニ：良くなかった 0 無回答： 1
※ a. か b. を選択しなかった回答のうち イ：大変良かった 2 ロ：良かった 1 ハ：普通 0 ニ：良くなかった 0 無回答： 2	

《コメント》

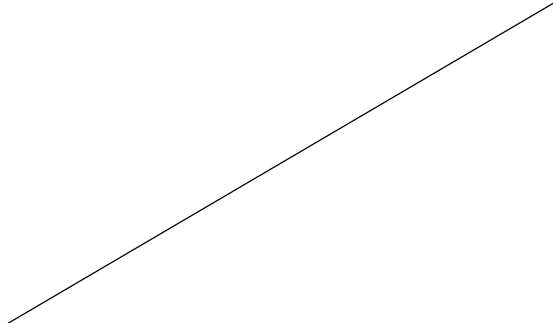
(a)

- ・「ものランゲージ」はすごく面白かったし、いろいろ自分の中にあるものが揺さぶられた。
- ・参加型学習を通して私の知らない現実の熱帯雨林の姿、私たちとの生活のつながり、抱えている問題をとても分かりやすく説明してもらった。大変参考になり、楽しかった。
- ・知らなかったことがたくさん知れてよかった。品物のむこうに熱帯雨林が見えてよかった。勉強になった。
- ・物を通して理解するのがよかった。

(b)

- ・ これからの学習に1つの考え方を得た。ゲームから誰が得していくのかが良かった。
- ・ シミュレーションが参考になった。
- ・ 自分自身の中にこのセッションから気づきが生まれた。が、実際の授業内容にブレイクダウンするのが難しい。
- ・ ネパールの赤ひげ先生（若林先生）のことをここで久しぶりに聞くことになるとは思わなかった。早くから国際協力の姿勢について語られていることを新たに見直そうと思った。
- ・ 最後の説明では日本が自虐的になりがちになる気がする。どんなシステムを作るのが問題ではないだろうか。携帯電話が悪いと言って減っただろうか？使うのは仕方なし、その上で考えていくべきではないだろうか？
- ・ 「できるだけ稼ぎましょう」は、本気になるると本当に大変なことになると実感した。

(4) セッション3「平和」

<p>a. 平和はいかにつくられるか (講師：高野 剛彦)</p> <p>イ：大変良かった 7</p> <p>ロ：良かった 8</p> <p>ハ：普通 1</p> <p>ニ：良くなかった 0</p> <p>無回答： 3</p>	<p>b. わたしが難民になったら (講師：中尾 秀一)</p> <p>イ：大変良かった 5</p> <p>ロ：良かった 11</p> <p>ハ：普通 1</p> <p>ニ：良くなかった 0</p> <p>無回答： 2</p>
<p>※ a. か b. を選択しなかった回答のうち</p> <p>イ：大変良かった 5</p> <p>ロ：良かった 2</p> <p>ハ：普通 0</p> <p>ニ：良くなかった 0</p> <p>無回答： 2</p>	

《コメント》

(a)

- ・最後のセッションには我ながら「答えを見つけよう」としてしまい、しまったと思った。
- ・本当によかった。ありがとうございました。

- ・ イスラエル戦争をそれぞれの立場からの意見を考えることができた。
- ・ ロールプレイがいまいち。
- ・ セッションそのものとは直接関係しないが、イスラエル VS パレスチナのワークは「イスラム教徒＝テロリスト」という日本社に根強い偏見を助長するのではないかと危惧している。

(b)

- ・ 分かりやすかった。
- ・ 以前、ほぼ同様の内容のものに参加したことがあった。分科会の内容をちゃんと読んでいなくて失敗だった。でも、講師の先生はたいへん話術がたくみで惹きつけるものがあった。
- ・ 日本人として北朝鮮の難民がやってきたら、どうなるのか？子ども達に何を伝えたいのか？下手な授業だと偏見を助長するだけになるので要注意だと思った。

(5) クロージングセッション

イ：大変良かった	11
ロ：良かった	18
ハ：普通	8
ニ：良くなかった	0
無回答：	10

《コメント》

- ・ もう一度自分を振り返ることができた。
- ・ いろいろな立場の人と話せてよかった。いろんな意見を聞いてよかった。
- ・ 少人数での話がよかった。
- ・ 何事も振り返ってみて、自分の思いを交流するのはすてきだと思う。
- ・ 時間厳守。

2. 今後、セミナーで学んだことを授業などに活かそうと思えますか。

イ：はい	43
ロ：いいえ	1
無回答：	3

《それはなぜですか？》

- ・ 一方通行の知識伝達型の講義では子どもが持っている力を十分に伸ばせない。参加型ワークショップの手法がこれから主流となる。
- ・ 国際理解教育を身近なものとしていこうと学校が取り組んでいるので。
- ・ 活動を通して学びを深めることのできるプログラムとして有効だと感じるから。
- ・ 難しい。子どもに教える前に自分がもう一度しっかり学ぶ必要があるとひしひし感じた。
- ・ そのまま活かせないかも知れないが、学んだこと（知識）も含めて活かせると思う。
- ・ 勤務校に外国籍の児童がいて、その子も含めた「文化」を大切にしていきたいから。
- ・ 職員研修がこの分野はなかなか進んでいないため、授業など実践化されることが今のところ

少ないため、活かしたいと思う。

- ・ 活かせることがあれば使っていきたい。
- ・ 国際理解教育をしたいから。
- ・ ロールプレイにより様々な立場に立ってみることで、自分がその役でどんな気持ちになるか、何を大切に思うか、違う立場の人たちと互いにどこで折り合えるか、それを探るプロセスを体験できると思うので。
- ・ 自分が知らないことがたくさんあったので。
- ・ とても大切な学習だと思うから。
- ・ すぐにではなく、長い時間かかると思うが、ひとつずつ子どもたちと一緒に学び、考え、行動していきたいから。
- ・ 大切な視点が含まれているから。
- ・ いいモデルだから。
- ・ 生徒自身がしっかりと体験して考えられるプランがたくさんあったので。
- ・ 子どもたちに身近に感じてほしい。
- ・ 話の構成の仕方などがよく参考になったから。
- ・ 参加型人権学習の方法論を具体的に体験できたことは有益であった。その反面、ファシリテーターが相当の知識とイニシアチブを持っていないと各グループの誘導やまとめとなる整理が困難であることも感じた。日々、研修を行っていかねばならないことを痛感した。
- ・ 現在の世界の事情を理解できる人になってもらうため。
- ・ 夜間中学なので慎重に扱いたい、重要なテーマであるから。
- ・ やってみて自分が楽しく、なるほどと思ったから。
- ・ 考え方の根本になる大切なことだから。
- ・ そのために参加したので。
- ・ 実践をすることによって、まずは貧困や差別をなくす仲間を増やしなが、着実にすべての人が生きやすい世の中をつくっていくため。
- ・ 地元にはこのようなセミナーが少ないと思うので広げたい。一人でもたくさんの人に「人」「平和」について考えてほしい。
- ・ 次の世代への教育の主題はあくまでも自分と他者、世界との関係をゆっくりと問い直すことにほかならないと思うから。
- ・ 多文化共生の学校づくりでおでこにシールを貼り、マイノリティとマジョリティを体験するのは面白かったし、子どもにも分かりやすいと思った。
- ・ 道徳で国際理解教育の授業を行う予定で、子どもたちに分かりやすく伝えられると思う。
- ・ 生活に関わる問題、そして未来にも関わる問題なので、子どもたちと一緒に取り組んでみたいと思っている。
- ・ 具体的で楽しみながら問題の根本的な部分にふれることができると思うから。
- ・ これからの時代は大きく周りを見て、広い視野でものごとを捉えていくべきだと思う。
- ・ 今後の子どもの学習（例えば総合的）を考えても今の世界はどういう姿になっているかを知らせる必要があると思うので。
- ・ 2学期に全校総合学習を計画中である。今年度のねらいは「国際協力のこころを育もう」。

- ・ 何がとはいえませんが、とにかく自分の世界を広げることができた。
- ・ いろんな答えがある授業をしたいから。
- ・ 対象がない（ので活かさない）。
- ・ いろいろな物の見方があることを知るひとつのきっかけにしたい。
- ・ 大切なことだから。今の生徒にたいへん必要とされている（はずの）内容だったと思う。

3. 今後、各主催団体に期待することはどんなことですか。

- ・ 今回のように安い費用で参加できるワークショップを開いてほしい。
- ・ 海外研修やキャンプでのワークショップ等、実際にふれ合う形の研修会。
- ・ 各市町村の施設を活用して、より近い場所で研修できればと考える。
- ・ 現地の中の情報をもっと知りたい。
- ・ 教員同士、関係団体のさらなる情報交換の機会とネットワーキング。（2）
- ・ このようなセミナーをどんどん主催してほしい。（5）
- ・ 研修プログラムの継続的实施。（5）
- ・ 今後とも共催企画を期待する。
- ・ 授業に活かせるもの。
- ・ 定期的にセミナーなどの案内がほしい。
- ・ JICAの活動を具体的に分かりやすく教えてもらえる場があればと思う。
- ・ 世界的必要に答えるため、私たちができることについてリーダーシップを取り、プログラムを示してほしい。
- ・ 各団体の活動内容や利用方法などを紹介していただき、助けてもらえそうな感じで、 どんどん外部にも情報を求めていこうと思った。ありがとうございました。
- ・ いろいろな情報やワークショップ手法をホームページ等で紹介してほしい。
- ・ 活動の根本にある考え方（国際的な物の見方など）をどんどん提供してほしい。また、それが理解できるノウハウを伝えてほしい。
- ・ 学校等に来て、話をしてほしい。
- ・ 2学期の総合学習計画につぎ、できれば至急にアポイントを取って青年海外協力隊（日本人）、留学生（外国人）などを招き、本日学んだような活動をさせたいと思っている。
- ・ 色々な先生方の実践発表を見せていただき、参考にさせてもらいたい。
- ・ 教育委員会も主催者側に入り、現場での開発教育の取り組みも進むと期待でき、とてもうれしい。

4. 当セミナー全体についてお答えください。

《開催時期について》

参加しやすい：	41
参加しにくい：	2〔希望：7月下旬(1)、8月20日前後(1)〕
無回答：	4

《日程（2日間）について》

長い：	5
ちょうど良い：	37
短い：	1
無回答：	4

[コメント]

- ・ できれば1日だけのプログラムがよかった。
- ・ 内容が盛りだくさんでそれぞれのセッションが慌しかった。これだけの内容ならもっと時間をかけるか（終日×2日間など）、時間がそのままならば内容を減らした方が学びは深まるのではないか。
- ・ a. b.のセッションに分かれていたが、どちらも受けてみたいものもあったので、今後はそのようなことも考えてほしい。セッション案内の校種分けは必要ないと思う。

5. このセミナーをどのようにしてお知りになりましたか。（複数回答あり）

イ：教育委員会からの案内	20
ロ：ホームページ	8〔JICA兵庫HP(3)、〕
ハ：チラシ	10〔JICA兵庫(4)、神戸YMCA(2)、 難民ワークショップ(2)、HIA(1)〕
ニ：口コミ	6〔JICAスタッフ(2)〕
ホ：その他	4〔メール(2)、JICAメルマガ(1)、神戸新聞(1)〕
無回答：	4

6. その他、ご意見、ご感想、ご提言などご自由にお書きください。

- ・ 他府県からインターネットのHPを見て参加させていただいた。本格的なワークショップに参加するのはこれが初めてで、とても勉強になった。
- ・ 私の知らないところでいろいろな方が世界のために一生懸命働きかけをされていることが改めて分かった。2日間ありがとうございました。

- ・ 学校現場にない視点や実践に触れることができた。
- ・ 兵庫県民として HAT 神戸ほか周辺機関の存在を知ることができた。
- ・ スタッフの方々に温かくお世話いただいたことがありがたく、印象的だった。
- ・ いろいろな仕事、校種、一般の人の参加があってよかった。
- ・ 開発教育は自分を見直すことだと思う。この視点は大切だと思う。
- ・ 身近に感じることができた。
- ・ 豊富な資料と今後の授業のヒントとなる様々なアプローチを教授していただき、大変有意義な時間を過ごした。現場ではより分かりやすい、平易でインパクトのある教材を日々探し続けている。国際協力の第一線で活動する方々からのご提案を含め、今後もこのようなセミナーが催されることを希望する。
- ・ JICA の建物があることを知ることができてよかった。
- ・ 学校の先生によりたくさん参加してもらえるといいと思う。
- ・ 教育の現場を変えていく主体は学校現場では教員であり、地域では NGO や NPO に連なる市民であることは言うまでもない。このような研修会の広がりや様々な取り組みの実践例の交流を生み出していききたいと思う。
- ・ セッションを通して、中高生向けのプログラムが多いかなと思った。小学生には少しかみくだいてプログラムをつくらなくてはならない。本セミナーに参加できた私たちから輪を広げて発信していきたいと思う。
- ・ 参加者同士で話をする機会があまりなかったのが残念だった（1日目の交流会に参加できなかったのだ）。
- ・ 藤原先生や中尾先生のすばらしい語り、引き込む力、おちをつけるところなど、学ぶことが多かった。
- ・ 開発教育の方向を示していただき、ありがたく思う。
- ・ とても参考になり、新たな視点から学ぶこともできた。ただ、人数制限のため参加できなかった同僚がいて、とても残念がっていた。もう少し参加のキャパが増えればと思う。
- ・ 授業のための手法だけではなく、今の自分の生活や考え方を見つめるいい機会になった。
- ・ とても充実しており、楽しく参加できた。
- ・ 聞くこと、体験することが豊富な上、指導者陣の準備等も行き届き、大変感動した。また来年も楽しみにしている。

多文化共生のための 国際理解教育・開発教育セミナー

共に生きる地球社会を作るための「多文化共生教育」「国際理解教育」「開発教育」。教育委員会、JICA、難民事業本部、YMCAが実践セミナーを共催します。

参加者は生徒が自分自身で考える参加型の手法を体験。経験豊富な講師陣から教室ですぐに使えるアレンジ法も紹介。自分で教案を組み立てるための情報源や資料も国際協力の第一線で活躍するスタッフから提供します。

二学期からすぐに見える情報満載の2日間。是非ご参加ください。

8月16日(月) 午後1時～5時

会場：JICA兵庫

17日(火) 午後1時～5時30分

神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

16日(月) 13:00～15:00	基調講演「開発教育、国際理解教育で何ができるか」 講師：藤原 孝章（同志社女子大学現代子ども学科教授） 人権、貧困、平和など地球的な課題を教育の現場でいかに考えていくのか、また、生徒が主体的に参加しながら学ぶにはどんな工夫をすればよいのか、高校、大学などで豊富な経験を持つ講師より、明日の授業のヒントを聞きます。	
15:00～17:00	セッション1 人権・多文化共生	
	a. 多文化共生のまちづくり（小・中・高校～） 進行：岩山 仁（多文化共生センターひょうご） 本当の異文化コミュニケーションというのは、単に相手の国の言葉を理解するということではありません。自分との違いを認め、その人自身を理解しようとするのだといえます。そんなコミュニケーションのあり方を共に考えましょう。	b. 多文化共生の学校づくり（小・中・高校～） 進行：綿巻 秀樹（川西市立加茂小学校教頭） 近年、県下の外国人児童生徒、住民は増加の傾向にあります。これらの現状を把握するとともに、児童生徒が多文化共生を考えるきっかけづくりとなるワークの体験や、学校づくりのシミュレーションを通し、各学校で取り組む際の課題等について考えます。
17日(火) 13:00～15:00	セッション2 貧困・開発	
	a. 熱帯林をめぐる開発と私たちの暮らし（小・中・高校～） 進行：荒川 共生（開発教育協会大阪事務所） 熱帯林をめぐる開発の問題は、私たちの暮らしと密接に関わっています。ワークショップを通して熱帯林とのつながりに気づき、そのつながりの先で起きている先住民を取り巻く問題について学び、その解決に向けて何ができるのかを考えます。	b. 貧困の原因はどこに（中・高校～） 進行：藤野 達也（PHD協会・開発教育協会） 生きていくためのいくつかの条件、食、住、健康、教育などにある不公平、不公正はどこからくるのかを考えるワーク「できるだけ稼ごう」。ひとつの地球で一緒に暮らしていくには、どうしていけばいいのでしょうか。私たちにできることは何かを考えます。
15:00～17:00	セッション3 平和	
	a. 平和はいかにつくられるか（中・高校～） 進行：高野 剛彦（神戸市立六甲アイランド高校教諭） 「平和」とは、単に戦争のない状態をいうのではなく、人々の生きる権利や自己実現の機会が保障された状態をいうとされています。そんな「平和」を構築するために、私たちにできることを生徒と共に考える実践を体験しながら、新しい取り組みを探ります。	b. わたしが難民になったら（中・高校～） 進行：中尾 秀一（難民事業本部関西支部） 兵庫県は全国で2番目に多くの難民が住む県です。難民とはどんな人のことか。なぜ難民になってしまうのか。どんな生活を強いられているのか。難民の発生から帰還までをシミュレーションしながら、難民問題について考えます。
17:00～17:30	クロージング・セッション	

※セッション1～3はa、bどちらかの分科会を選択してください。

参加費：無料 定員：80名（先着順）

申込み：氏名、所属、電話番号、メールアドレスを7月20日(火)までにお知らせください。

申込先：JICA兵庫 Tel：(078)261-0341 (代) Fax：(078)261-0342

E-mail：jicahica-kaihatsu@jica.go.jp

主催：独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（JICA兵庫）

兵庫県教育委員会

(財)アジア福祉教育財団難民事業本部

(財)神戸YMCA

